

# 言いたい ほぐたい

復と引き換えても、「芹沢光治良戦中戦後日記」によると、イリアム・マードックの「シヨパン評伝」を面白く読む「シヨパンはなかなか面白いが大仰だ」は、小説『巴里に死す』に登場する。ドビュッシーの「亜麻色の髪の乙女」は、戦後、光治良が再訪したパリで、ピアノ

沼津市が生んだ作家、芹沢光治良の生誕日(5月4日)、『芹沢作品の朗読と光治良が好んだ音楽を聴く会』を催した。計画を上回る人数のご参加をいただき、厚くお礼申し上げます。

「超越した力」との対話が雄大な自然を背景に描かれる。朗読によって、詩のよらうに簡潔な言葉が、いっそう印象強く、光治良は、詩情を讀者に伝えるのに、音楽の表現力もまた自分の中で培ってきたように思われる。光治良が遺した「として」している。まで歌って励ましてく

## 光治良を偲ぶ会

不破 久温

「朗読」で取り上げた『巴里に死す』の終章の直前。主人公の伸子(しんこ)は、完治しない結核の身をおして、スイスの療養所から、幼い娘を預けてあるパリに向かう。病からの快

た、5月には「ウレた優しい姿」を記憶しておられる。ベートーヴェンのピアノソナタ「悲愴」は、小説『巴里に死す』に登場する。ドビュッシーの「亜麻色の髪の乙女」は、戦後、光治良が再訪したパリで、ピアノ

随筆に登場した曲、光治良と交流のあった方の記憶をもとに選んだ。シューベルトの歌曲「アヴェ・マリア」「菩提樹」は、光治良の三女の文子氏が、戦時中「心も荒涼としていた私達に、(軽井沢の疎開先で)美しい

(沼津芹沢光治良文学愛好会、上石田)